

4月7日 初例会

アントニイ・パークリー「偶然の審判」レジュメ

※以下の文章は会話形式で進みます。読者の皆様も一緒に、文責の逼迫した心情が書いた荒唐無稽な会話劇をご堪能ください。

登場人物紹介——某大学某ミステリ研究会

水澄 創二（みすみそうじ）：某ミステリ研究会二回。ミステリ初心者。なんでも人に聞くゆとり。

久生 瞳（ひさおひとみ）：某ミステリ研究会三回。会長。ミステリ中級者。特技はググること。

水：大変です会長！ まだレジュメが完成していません！

久：なんですって！ 明日は新歓例会じゃない！ 今日はあと三時間しかないのよ！

水：そういうわけで、会長の助けが必要なんです！ お願いします！

久：……いい大人がホントに土下座してるの、初めて見たわ……。まあ、わかったわ。仕方ないわね。

私で良ければ力を貸してあげるわよ。で、課題本は何なの？

水：アントニイ・パークリー「偶然の審判」です。

久：なんとまあ微妙なところを突いてきたわね……。うわ、なにこれ誤字だらけじゃない。

水：二十数時間睡眠不足のまま戦った結果なんです、許してください。

久：知らないわよ。まあ、いいわ。それで私の助けが必要って、具体的にはどうしたらいいわけ？

水：それが……わからないんです。

久：は？

◆ミステリとは何か？

水：『ミステリ』って、そもそも何なんですか！ わけがわからないんですよ！

久：ググれ、って言いたいところだけど、幸い、ここに早川書房の『ミステリ・ハンドブック』があるわ。ここに新保博久が記した、割とわかりやすいミステリの定義があるの。これを参考にしてみて。

水：コピーアンドペーストですね！ 大学生っぽいです！

久：黙れ！ そういうこと言うと教えてやんねーぞ！

水：ひい！ 会長怖い！

久：ご、ごほん。ではここに、偉大なる先人たちが残したミステリの定義とやらを記してみましようか。

①江戸川乱歩

「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く径路の面白さを主眼とする文学である」（『幻影城』1951年、岩谷書店）

②H・R・F・キーティング

「私なりに説明すると、ミステリとはエンタテインメントととしての価値を第一に書かれた小説であり、その主題が何らかの犯罪の形をとっている小説だと言えよう」（長野きよみ訳『ミステリの書き方』86

年原刊、邦訳は早川書房)

③甲賀三郎

「探偵小説とは、先ず犯罪——主として殺人——が起り、その犯人を捜査する人物——必ずしも職業探偵に限らない——が、主人公として活躍する小説である」(「探偵小説講話—まえ書」35年初出、講談社版現代推理小説体系別巻二所収)

水：探偵……小説？

久：ああ、当時の日本ではそう呼ばれていたのよ。ディテクティブ・ストーリーなんて格好つけて言ったほうがわかりやすいかしら。戦前から戦後にかけての漢字制限で、「偵」の字がなくなってしまったから、新聞などのメディアでは「探てい小説」って表記する羽目になっちゃったの。なんか、格好つかないわよね。間の抜けた感じで。でもその頃にね、木々高太郎が新しく「推理小説」って呼び方を提唱したのよ。同じ時期には松本清張の活躍もあって、従来の探偵小説のイメージが一一新したわ。それが今の私たちの慣れ親しんでいる「推理小説」という呼び方に続いているわけ。まあ、現在の作家でも敢えて「探偵小説」と呼ぶ人もいるけどね。きっと彼らはやっぱり古きよき探偵小説、っていうイメージを持ち続けているのじゃないかな。……と、話がそれたわね、戻しましょう。

水：ミステリの定義、ですね。

久：①～③、どれも今の時代から考えると、ちょっとイメージが違うわよね。

水：①はいわゆる謎解き小説、本格ミステリってやつですか？

久：そう考えてみても大丈夫かしら。でも範囲としては狭すぎるような気がする。

水：②も、今じゃあ犯罪小説、クライム・ノベルみたいな。謎って感じはしませんよね。

久：じゃあ③はというと、謎を解く主体に重心があるわね。それともう一つ、世界最初のミステリと呼ばれる、エドガー・アラン・ポオ「モルグ街の殺人」に関して触れておこうかしら。都筑道夫は『黄色い部屋はいかに改装されたか？』(75年、晶文社)で殺人の物語を論理的・合理的に解決した、という点で、推理小説の生みの親なんだと述べている。そしてその論理的解決を行う人物であるのが探偵だとも。探偵を、警察とはちがった目で犯罪を見る人物とも称しているわ。

水：謎を解く主体＝探偵の図式になっていますね。

久：でも、場合によってはこれでも結構厳しいわよね。新保はそれを踏まえて、

「一つないし一連の犯罪を主題とし、その犯罪について探偵役、あるいは犯人、もしくは被害者を主人公とするエンタテインメント小説」である、と言っているわ。

主人公がどの立ち位置でも問題なく作用するし、犯罪について扱ったものだし、そういう点ではただのイイトコ取りって感じよね。

水：それじゃあ、これも厳しいって言うんですか？

久：重箱の隅をつつくようだけれど、最近だと、そもそも犯罪以外のものを謎に仕立てて、それを紐解くような形式をとる小説は結構多いのよ。それもミステリだっていうのだから、困りものよね。だから、推理小説は犯罪を扱ったものは多いけど、今では「物語中に示される不明瞭な事柄について、登場人物が関わっていき、次第にそれが明らかになっていく経路(あくまで論理的に)を描いたエンタテインメント小説」と言ったほうがしっくりくるような気がするのよね。もちろん広義の意味として。まあ、ミステリの定義について話してしまうと、ミス研の人たちがそれぞれの持論をぶつけ合うハメに

なるだろうし、そういうのは別の機会にしたほうがよさそうじゃないかしら。論より証拠。実際に「偶然の審判」にあたってみましょ。

◆海外小説＝読みにくいというジレンマ

水：でも、海外作品ってどうも手が出しづらいんですよね。

久：それはうちのミス研全体に言えることよね。大体理由は想像つくけど。

水：え、なんなんですか？

久：理由は4つあります（ジョブズ風に）。

第1に、海外独特の文体に慣れていないため、読むのに時間がかかる。

第2に、登場人物の名前が覚えにくい。渾名を使われるとさらに。

第3に、値段が高い。同じページ数で、国内の1.5倍から2倍。

第4に、読むまでそれがどういった話なのか想像がつかない。

周りの情報も少ないからハズレを引いたときのダメージが大きい。

水：一冊二五〇〇円払ったのに、しょうもないオチだったときの落胆っぷりといったら……。

久：海外ってマイナスイメージがあまりにも先行してるのよね。でも実際のところ、海外作品の文体は慣れるとそこまで苦にならないし、日本にはないキャラクターの語り口はそれはそれで味があるもの。

水：その慣れるってのが問題なんですよ。普通、慣れるまでに挫折します。別に理由もその4つだけじゃないですよね？ 文化とか、話の展開とか、わかりにくいところ多いですもん。

久：そんなことだろうと思ったわ。だからこそ、そんなアナタにパークリー。

水：そんなアナタに……ってそういう話でしたっけ？

久：いちいち話の腰を折らないで。話はここからなの。とりあえず課題作「偶然の審判」の作者、アントニイ・パークリーについて紹介してあげるから、耳の穴かっぼじってよおく聞きやがれよ。

水：(適当な言い方だなあ……)

アントニイ・パークリー

本名：アントニイ・パークリー・コックス Anthony Berkeley Cox

別名義にフランシス・アイルズ、A・B・コックス、A・モンマウス・プラッツなど

1893年生、1971年没。

当初はA・B・コックス名義で、小文や短篇小説を書いていたが、1925年『レイトン・コートの謎』で推理小説家としてのデビューを果たす。これが大絶賛で、パークリー本人も推理小説が金になると気づいたので、推理小説を書き続けることになる。

日本での代表作は『毒入りチョコレート事件』、『第二の銃声』など。別名義のアイルズでは『殺意』。探偵小説の可能性の追究、犯罪小説の提唱と実践、ディテクションクラブの創設、書評家としての活躍など、さまざまな面で同時代作家の一步先を行っていた、ミステリ史上もっとも重要な作家のひとり。

水：なんか、過大評価されてませんか？

久：どこが？

水：「偶然の審判」を読んだときに思ったのは、なんだろう、「ああ、この話どっかで聞いたことあるな」みたいな感じだったんですよね。だから別に、すごいとか思わないんですよ。同時代作家の一步先って、

言われてますけど、あの時代の人たちって他に誰がいたんですか？

久：アガサ・クリスティとか、S・S・ヴァンダインとか、エラリー・クイーンとか、ディクソン・カーとかが有名どころかな。他にも沢山いるわよ。1920～1930年代は、今の日本人が海外のミステリを読もうと思ったら、必ずぶち当たるであろう人たちがばかりよ。あなたも一人か二人、名前くらいは知ってる人がいるんじゃないの？

水：確かに。でも、ぼく、パークリーって聞いても、誰？ って思うくらいですから。

◆パークリーの作風について

久：そうね、パークリーがいったいどういう話を書いていたか、少しだけ知る必要があると思うわ。そのためにも彼が残した有名な二つの文章に触れてみましょう。

まずひとつめは、推理小説デビュー作『レイトン・コートの謎』の序文の一部。

僕が、最終的に事件を解決させることになる紳士に、現実の世界ではこうするだろうという行動取らせようと努めたのを、お父さんならわかっていただけでしょう。言い替えれば、彼はスフィンクスからはほど遠く、時には一つ二つ間違いをしでかすということです。例の鷹のような目をして、唇をきつく結び、静かに容赦なく物事の核心をすばりと突いて、一度たりともぐらついたり、偽のゴールを追ってわき道にそれることもないような輩を、僕はあまり信用していません。

水：探偵なのに、頭が悪い？

久：その通りよ。パークリーはこの父宛の序文の中で、いわゆる「間違える探偵」というものに言及しているの。ちなみにこの文では同時に、あくまでフェアプレイであるために小説では読者にあますことなく情報を開示すべきだとも述べているわ。デビューの時点で既に当時の探偵小説というものに対して懐疑的な視線をもっていた、ひねくれもののようなね。そしてもうひとつ『第二の銃声』の序文。

探偵小説の書き手である我々が、真剣に耳を傾けるべき唯一の批評家の言葉を借りよう。…「技巧に関して言えば、聡明な作家は、現在二つの方向を模索しているようだ……ひとつはプロットを語る上での実験に向かう道で、そちらでは作家は逆さまに語ったり、あるいは遠まわりをしたり、ばらばらに語ったりする。もうひとつは性格描写や雰囲気深化させる道だ」。この指摘は当たっているように思う。そして、前者の選択肢をすでに試し終わった実験家として、私は今回は後者に取りかかっているというわけだ。

水：結構すごいこと言ってるような気が……。

久：パークリーはこちらでは心理的側面を描写した推理小説を模索しようとしていたわ。『第二の銃声』でそれが成功したかどうかと言えば、難しいけれど。一般的に上記の内容から考えて、彼は別名義での執筆でその方向性に進んだと言われているわ。

水：別名義？

久：フランシス・アイルズのことよ。そちらの名義の『殺意』は推理小説というよりは心理サスペンス。たぶん売り文句は倒叙ものの傑作ということになっているはずだわ。今回は深く扱わないけれど、パークリーの興味の一つとしての人間性・犯罪そのものが作品になった作品と言えるわね。長い間、上の序

文は、バークリーが探偵小説→犯罪小説への流れを支持していたように思われていたけれど、実は違うんじゃないかっていう話もあるわね。

水：というと？

久：確かにアイルズ名義ではそういった犯罪心理小説を出しているけれど、バークリー本人はこれ以降も心理にアプローチした作品だけでなく、プロットに趣向を凝らした推理小説を書いている。どちらかと言えば、実験のひとつとしてこういうものがありますって、紹介したにすぎないのよ、彼は。

水：それじゃあバークリーの作風って何なんですかね。

久：国書刊行会版『第二の銃声』にある真田啓介の解説がわかりやすいわ。彼はバークリーの作風を大きく5つに分類にして紹介しているの。

①どんでん返しの多用

②解決の多重性

③ユーモア・ウィット・風刺

④犯罪学への関心

⑤人間性への関心

ということで、バークリーのペンネームによってその比重が変わるということを述べているわ。

特に①②はバークリー名義、③はコックス名義、④⑤アイルズ名義。もちろん、名義にこだわらなくても、バークリーの諸作品にはこれらに共通する部分が出てくるわ。上記の項目をまとめてしまうと、次のようになるわね。

I プロットの構築力

II 喜劇的センス

III 人間性への洞察力

以上の3点がバークリー作品の特徴だといって、まず間違いないわ。

それじゃあ具体的な作品に触れていきましょうか。『第二の銃声』の序文にこうあったわよね、「前者の選択肢を既に試し終わった」って。

水：ありましたけど、スルーしていました。

久：あ……そう、ね。でもここでやっと「偶然の審判」の話が出来るわけなのよ。

◆「偶然の審判」と『毒入りチョコレート事件』

久：ところで、水澄くんは『毒入りチョコレート事件』はご存知？

水：名前ですけど。確かどこかの作家が言っていたような……。

久：たぶんミス研に在籍しているかぎり、この作品名は必ず聞くことになるから、このさい例会でどうい話か確認しておきましょうね。

水：あれ、でも今回の課題本の冒頭、「毒入りチョコレート事件」って言ってますよ？

久：そう。『毒入りチョコレート事件』というのはこのバークリーの作品のことなの。ほら、これ（文庫本を取り出す）。通称、『毒チョコ』よ。

水：「偶然の審判」のなかに出てくる「毒入りチョコレート事件」とは何の関係が……？

久：根本的にはこの2つの作品、全く同じ事件を扱っているの。クラブにチョコレートが送られてきて、それを男が妻のために持ち帰って……っていうくだりから全部同じ。登場人物の名前は違うけど、事件そのもののプロットは全く同じだわ。もちろん、長編と短編という部分を別にすればね。

水：それじゃあどこかの作家が言っていたのはこっちの『毒入りチョコレート事件』？

久：そうね、短編の方を言うのであれば「偶然の審判」と述べているでしょうし。

水：でも、長編ってことはこの事件を引き伸ばしたってことですよね？

久：ううん、そうとは言えないわね。実際事件そのものに関する描写のページ数は、「偶然の審判」とさほど変わらないの。むしろ違うのは……

水：違うのは？

久：探偵役の推理が6種類出てくるということね。正確に言えばもっとあるのだけれど。事件に関しては冒頭の50ページくらいで、残りおよそ2、300ページあまりがすべて解決編。探偵役となった登場人物が毎回、それぞれの推理を披露していく形式になっているのよ。「偶然の審判」におけるシェリングムの推理もその中のひとつ。事件1つに対し解決6つという具合で、普通の推理小説だったらまず取らないであろう展開になっているの。これが、パークリーのプロットが評価されている何よりの点。作品そのものが実験性に満ちているから、とても魅力的に見えるのよ。

水：それじゃあ先輩たちが何かしらのミステリに触れるときに『毒チョコ』だってよく話していたのは、この形式を採用したミステリのことだったんですね。

久：「多重解決」と言われるプロットを採用した作品のことね。国内で有名なのはやっぱり貫井徳郎の『プリズム』かしら。作中にチョコレートをわざわざ出しつつ、パークリーのしなかったやり方で多重解決に挑戦しているわ。まあ、あえて『毒チョコ』の意義のようなものを言うのであれば、あの時代にもはやされていた推理小説に対する皮肉というか、作者がこう決めたから探偵が正解するようになっているんだってことをあからさまに証明してみせたのよね。つまり、「正解はひとつじゃない」。

水：だから『毒入りチョコレート事件』って結構有名なんですね。

久：そもそも海外を読んでない人はあまり手を出さないけれどね。今じゃあパークリーの代名詞にまでなっている作品だし、読んでみて損はないんじゃないかしら。長編のほうだとシェリングムが推理を思いつかなくて焦ってるのがまるで夏休み終了を目前にした子供みたいで、見ていてスカっとするわよ。

水：何か嫌なことでもあったんですか……。

◆「偶然の審判」再考

水：でも、そうなっちゃうと、「偶然の審判」の当て馬っぽさが強調されますよね。地味ですし。

久：それは否めないわね。良く出来た短編だとは思いますが、今となっては使い古された手だし、そこに新鮮な驚きというのは少ないのかもしれないわね。エラリー・クイーンは『黄金の十二』というベスト短編アンソロジーのひとつにこの「偶然の審判」を選んでいるのだけれど、ベタ褒めしてるのよね。

「これまで書かれた中では、もっとも完璧に近いプロットを持つ短編」って言うくらい。

水：ううん、そんなに面白かったっけ？

久：端的に言ってしまえば、出来が良すぎるのよ。話がまとまりすぎている、と言ったほうがいいかしら。偶然不運な事件があり、警察は犯人を逮捕できない。警察は探偵に頼み込み、探偵はちょっとしたことから解決の糸口を見つけ出す。そこには意外な犯人の考えた企みがあって、その経緯を警察に伝えることによって事件解決。

水：今考え直すと、おどろくほどアッサリしてますよね。

久：長編じゃないから、ヒネクレた展開にも出来ないしね。でも、個人的にはこの「偶然の審判」のほうが好きだったりするのよ。

水：それはプロット小説としてっていう？

久：プロット小説、というと、どうしても揶揄されてる感じがするから、たぶん違うわね。もちろん『毒入りチョコレート事件』の面白みは推論をぶつけてはそれが誰かの意見によってかき消されていくという展開の面白さがあるんだけど、「偶然の審判」は全く別のところで面白みがあると思うの。「偶然の審判」が25年、『毒チョコ』が29年発表で、その4年のうちにバークリーが何を考えていたのかは知らないわ。けれど「偶然の審判」そのものだって、よくよく考えてみると結構皮肉っぽいところがあるのよ。それこそ従来の探偵小説にあるようなものではなくて、バークリーらしさが滲み出てる。『レイトン・コートの謎』の序文や、『第二の銃声』の序文に通じているような、ね。

水：そんなヒネクレ具合、ありましたっけ？

久：よくよく考えてみて。まずモリズビー警部に事件を持ち込まれたさい、探偵のクセにシェリングガムはまったく本気で取り組もうとは思っていないでしょ。探偵としてはあまりにも気概がなさすぎるし、警察と同じ見解で満足しようとすら考えていた節もある。

水：探偵界の真面目系クズですね。

久：うう、ん……その言い方はどうかと思うけど、まあ、言いたいことはわかったわ。それに、皮肉っぽさがあるのはそれだけじゃないしね。

水：他にもあるんですか？

久：シェリングガムが探偵らしからぬ、というか、紳士らしからぬ振る舞いをしそうになるところよね。

水：ああ、あの小柄で、かんが鋭くて、金持ちで、おまけに未亡人でおしゃべりでっていう属性過多な。

久：偶然の出会いによって助けられて、**解決への糸口をつかむのに、当初はそこから逃げようとしてる**。これってけっこうな皮肉よね。6 ページ上段で、シェリングガムが「偶然という名の審判者」について話しているけど、誰を審判すると言えば、もちろん犯人なのだけれど。でもこれって「誰が審判するのか」っていうメタ的な見方をすれば作者によるストーリー誘導のことになる。シェリングガムは「機会というのは、よく訪れるものだよ」って言ってて、まさにその通りにやってくる。どんなに逃げようとしたって、解決が約束されちゃってる。**万事休す。探偵は解決から逃げられないのよね**。しかもその話を聞くだけで大まかな事件の真相には勘づけるくらいの大ヒント。むしろ正解と言ってもいいくらいの情報。

水：てかこの短編って、シェリングガムくんは推理してるんですか？

久：ほぼしてないよね。だからこそその皮肉っていうか。12 ページで自分の手柄であるかのように話してるけど、たぶんヴェレカー・ル・フレミング婦人がいなかったら何も出来てない気がする。まあ、原題は The Avenging Chance (Avenging は復讐の意) で、裁かれるのは探偵なわけじゃないから、素直に読んでればいいのだけだね。これは深読みレベルの皮肉だと思ってくれて構わないわよ。バークリーの他の作品を読むとね、こう、シェリングガムが正解しているのに対してふつふつと怒りが湧いてくるのよ。特に『毒チョコ』を読んだと。

水：なんか、イヤな読み方してるなあ。

久：じゃあまともな読み方をしましょうか。

水：え？ まだあるんですか？

久：もちろん。この作品は大枠のプロットがしっかりしている分、沢山考える余地があるもの。さっき、シェリングガムがほとんど推理していないって話をしたでしょう？

水：ええ、そうですね。

久：そこで、都筑道夫の言葉を思い出してみてもいい。探偵を「警察とはちがった目で犯罪を見る人物」と言っていたわよね。そういう点で考えてみると、この「偶然の審判」ってパークリーの名義なのに、フランス・アイルズ的な、犯罪小説の側面を帯びてくるように思えてくるのよ。

水：探偵小説でなくってことですか？

久：その通り。一度シェリングガムを主人公だっているところから背景に追いやると、この短編は、どこを上手く描写しているかってところがすごく明確になる。それは犯行の鮮やかさ、ただ一点よね。

水：確かに、ラストのくだりの『『偶然』に隙を与えない』みたいな言い方はカッコよかったです。

久：だから、シェリングガムは推理する役割、と考えるべきじゃなくて、警察の目には映らない犯罪を浮き上がらせてみせる役割として考えると、この短編にも違った味が出てくるんじゃないかしら。

水：単なる地味な短編ではないし、『毒チョコ』の当て馬でもない、それなりに傑作の理由があるんだってことはわかったような気がします。

久：短編の面白さはそのキレ味で判断されがちだけど、「偶然の審判」は構成美なのよね。

そして、皮肉っぽさ。パークリーの多くの作品によく言えることだけれど、そういう斜に構えた感じの作品って日本人が結構好みそうなところだと思うのよね。どんでん返しとか。

水：わかりました、じゃあ貸してくださいね！

久：買えよクズ！

〈了〉

ミステリに触れていくために、読み広げるために。 あとがきのかわりに

会話劇では海外が読みにくいという点はアッサリと飛ばしましたが、実際に読んでみるとこれが結構厳しい戦いなのです。特に海外を読んだことがなく、日本の文体に慣れている人にとっては、死活問題ですよね。感情移入がしにくいし、結末にも納得がいけないことも多いし。そんな人にささやかなステマ。

綾辻行人編『贈る物語 Mystery 九つの迷宮』光文社文庫

館シリーズの人、というイメージが強い彼ですが、ちゃんと初心者向けにアンソロジーを組んでいます。Who? How? Why? What? という4つの謎に関する有名作を国内外から紹介。クイーン、山風、ノックス、カー、ホック、法月、泡坂、連城と、粒ぞろいの短編たちが。最後には Challenge! と称して鮎川哲也の犯人当て「達也が笑う」を収録。初心者でなくとも、すべて名短編なので、美味しく頂けます。

江戸川乱歩編『世界短編傑作集 1~5』創元推理文庫

今回の初例会の「偶然の審判」は3に収録。ミステリの有名作から、それ以前の短編まで幅広く収録。1にはエラリー・クイーンによる私的ランキングもあり、長編から入るのがつらいという人は、ここから海外を読み進めるのもアリかも。ただし退屈な作品も数多く収録。オススメは3。

有栖川有栖編『有栖川有栖の本格ミステリ・ライブラリー』

ほぼすべてがヒネクレに満ちたアンソロジー。現在はこれではしか読めない短編も多くあり、我が同志社ミス研の前身である同志社推理研時代、アリスが書いた犯人当てに触発されて当時会員だった白峰良介が合宿の移動中に即興で書いた犯人当てや、名作「五十一番目の密室」や、海外の有名なワトソン役が密室に挑むユーモア短編など。『北村薫の本格ミステリ・ライブラリー』も一緒におすすめ。二つとも、むしろある程度ミステリを読んできた人に勧めたい。